

小田原史談

第 165 号
発行所 小田原史談会
小田原市栄町 2-13-20
アオキ画廊内 Ⅷ(24) 0637

遺稿

私の早川村誌

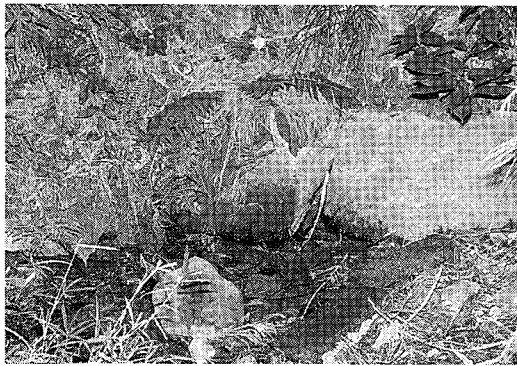
早川の製鉄遺跡

青木友吉

製鉄遺跡を捜し求めて

明治十八年(一八八五)十二月二日稿
の『皇国地誌』村誌相模国足柄下郡
早川村の古蹟の項に豊臣太閤秀吉公
所址として次の記述がある。

鉄滓があつた金堀沢の水原



金堀沢ハ城(一夜城)跡ノ南崖
下ニシテ是築城ノ時鍛工ノ住シ処
ナリト云フ一涌水アリ 其辺ニ今
モカナクノ居多シ(筆者傍点)

天保十二年(一八四一)稿といわれる

『新編相模国風土記稿』早川村には、
「金堀沢」について触れていない。

天正十八年(一五九〇)の後北条氏滅
亡後に、小田原藩は、石垣山一帯を
お留山(住民の狩猟や伐採を禁じた山
林)とした。明治八年(一八七五)、こ
の土地は、松岡氏の所有に帰し、初
めて開墾の鋤が入った。

鍛冶遺跡なら鍛冶沢とか鍛冶屋と
なつて当然なのに、「金堀沢」の地
名である。地名に興味を持つ私は、
「金堀沢」の謎に挑戦を試みた。

すると、そのうち、同じ早川で蜜
柑栽培をする平岡喜八郎氏から耳よ
りの話を聞き出すことが出来た。
それは、手洗いに使えそうな、土

で出来た半円形の容器を、土中から
発見したという事であった。それに、
近くに炭置場があつたのを知ってい
るといふ。

その容器は、大昔の単純な製鉄炉
の炉底で、いわゆるボール炉である
と考えられ、また、炭置場というの
は、粉状の木炭の層が表上に覆われ
ている状態にあるが、木炭が製鉄の
燃料として使用されたものと推定さ
れ、その場所は、製鉄遺跡の可能性
が高い。

だが、その現場を確認しなければ、
製鉄遺跡と断定はできない。

平岡さんは、大正九年(一九二〇)生
れ。この話をされたのは、亡くなら
れる一寸まえで、今から十五、六年
前の事である。

山は、戦後、農道の拡張や側溝の
整備のため原状は荒らされている。
それに、幾度かの地震や風水害によっ
て、昔の形状は保たれていないであ
らう、と思いつながらも、私は憑かれ
たように、早川の山中に金堀りの痕
跡を捜し求め歩いた。

今でも忘れはしない。昭和五十二
年(一九七七)一月二日、『皇国地誌』
に載る「金堀沢」の水もとの中から、
親指大の一塊の鉄滓を見つけた。
『皇国地誌』が書かれてからほぼ、
一世紀が経過している。ほんとに不
思議である。よく昔の鉄滓が残って
いたものである。

紀伊神社の祭神五十猛命

ここで、前回ちょっと記した早川
紀伊神社の祭神五十猛命について触
れておきたい。五十猛命は鉄に関係
ある神様とされるからである。
この神は『日本書記』に素戔鳴尊
の子として登場、次のように記され
ている。

はじめ五十猛神が天降られたとき、
多くの樹の種子をもつて下られた。
しかし韓の地にはうえないで、全
部もつて帰られた。そして筑紫か
らはじめて、大八州国全体にまき
ふやしていつてとうとう国全体を
青山にされてしまった。だから五
十猛神を有功の神というのである。
これが紀伊国に鎮座しておられる
大神である。

(井上光貞監訳『日本書記』中央公
論社刊)

紀伊国に鎮座する大神は、いま和
歌山県伊太祁曾にある伊太祁曾神社
の祭神大屋毗古命で、五十猛神と同
神であるとされる。

しかし一方、五十猛神は鉄に関係
ある神とする見方がある。山本博先
生著『古代の製鉄』(昭和50年9月学
生社刊)に、そのことが記されてい
る。

『播磨国風土記』に「因達の里」
というのがある。いまの姫路市街地

附近と考証されている。それは、「神功皇后征韓渡海の時、船の軸にいた伊太代いたたての神が、この地に住んだので、その神名をもって名にした」『住吉大社神代記』は、イダテを「船玉神」としているが、「初めから航海安全の神だったわけではなく結論的にいえば、この神は韓国から渡来した製鉄・鍛刀の技術神であった。たまたま皇后の渡韓にあたり、故国朝鮮への水先案内をひき受けただけである」と、山本氏は説明される。

そして、山本氏は更に、明治六年(一八七三)、肥後国玉名郡江田村で発見された船山古墳から出土の鉄製の直刀の銘文から考究されている。その銘分のうち重要なものは、「刀者名伊太□書者張安也」である。「伊太□」も「張安」もその名から韓(漢)人と推定されるが、「伊太□」は、何となく「伊太代いたたて」に似た趣きがある、と、いろいろと考証されている。

そして、五世紀の船山刀から約三百年たった養老年間成立の『延喜式神名帳』に類似の名があるのは、製鉄の技術者がしばしば神に祀られることがあるからである。「伊太□」に似た社号をもつ神社を「延喜式神名帳」から抜き出し、「伊多太いたた」、「伊多波刀いたた」、「伊太代いたた」六、「伊太祁曾いたた」一、の九座が挙げられている。このうち、「伊太祁曾」は、先に挙げた紀伊の伊太祁曾神社であるが、「曾」は「留」を書き誤ったも

ので、「伊太祁留いたたけ」が正しいとみる。「伊太代いたた」神社六座のうち五座が出雲にあり、韓国伊太代神社と、いずれもが、「韓国」と冠されていて興味深い。

山本氏は、「伊太□」を解くための神社名のほか製鉄関係者を調べ、「伊太祁」と読むと推定される。

『神名帳』のほかにも、印達・因達・射楯と、文字を異にする「イタデ」と読む神社は、紀伊・丹波・播磨にもあるとして、次のように記されている。

文字には意味はなく、イダテの音に意味があると思われる。おそらく古代朝鮮語と推定するが、特定の人名なのか作刀者の総称なのか、なんともわからない。しかし、祭神が「五十猛神」という神社もあることから推察すれば、この「五十猛神」も「イダテ」とよむことが考えられイダテは作刀神であったといえる。

鉄滓の鑑定を

窪田蔵郎先生に依頼

話を元に戻す。

一湧水の中から採集した鉄滓を早速、当時NHK小田原通信部記者で早川に住む加藤利之氏(前町立箱根郷土資料館々長)に持ち込み、鉄に詳しい方の紹介を依頼したところ、小田原市城山在住の窪田蔵郎先生を煩わすこととなった。

注 窪田蔵郎先生は、鉄の考古学の権威で、主な著述は次の通り。

- 『鉄の生活史』(角川書店、『たたら製鉄の復元とその鋳について』)
- (日本鉄鋼協会)、『新版考古学講座』九巻『製鉄』(雄山閣)、『鉄の考古学』(雄山閣)、『シルクロード鉄物語』(雄山閣)

鑑定の結果 鉄滓と判明

宮本常一氏は、「山に生きる人びと」の中で、山の民の生業を次の如く分類している。

- (1)狩人 (2)サンカ (3)木地師
- (4)杣人 (5)木挽 (6)山伏
- (7)木工師(杓子、鍛柄)
- (8)樽丸師 (9)炭焼 (10)鉄山師
- (11)運搬人 (12)高野聖

この宮本氏の漂泊の山の民の分類により、大凡の検討はつくと思われる。

このような模索の中に、昭和五十二年(一九五七)の秋、窪田蔵郎先生より次の書簡がもたらされた。NHK小田原通信部が先生に持ち込んだのは、この年の一月十六日で、それより十ヵ月以上経つてのことであった。

前略

御地石垣山にて採集されました鉄滓状の石につきましては、調査者として不本意のされ方でしたが、そのまゝにしておきました。誤解を招きますので一応科学的調査をしました。その結果は別紙

の通りです。市で現地調査しました結果などから考えましても、あの鉄滓がどうしてあの沢で採集されたものか、くわしく調べましたら、まだあるのでは無いかと思います。耕地になって埋没しているのかもしれない。少なくともあのNHKで持参いたしました鉄滓は紛れも無く鉄を製錬したものです(ただし他から持参されたものでしたら論外ですが)。

ともかく別紙で鑑定の経過が判りになることと思います。まずは取りあえずお知らせまで。

なお、この文章はNHKの加藤氏と市教委の立木望隆氏、市教委文化財保護課には届けてあります。

次に、別紙「小田原市早川石垣山の鉄滓について」を次に掲げる。

一月十六日(註昭和52年)NHK小田原通信部より鑑定を依頼された、小田原市早川石垣山城跡付近の沢中より採集の鉄滓については、当日即座に所見を教えてほしいとの希望なので、発見現場を見ないことでもあり、科学的調査を実施しなければ断定は出来ないかと前置きして。

この資料は、熊本県小袋山山麓の古代製鉄遺跡の鉄滓などに非常に良く似ている。量感もあり質も緻密で流動鉄滓と考えられる。このような鉄滓がその場所に沢山あれば、鍛冶

や鋳物ではなく、鉄鉱資源を製錬した遺跡があると考えて間違い無いと思う。また、年代については¹⁴C(炭素による年代測定法)ですらも疑問がある実情であって、従来の考古学的手法と科学的手法と総合して推定するものが望ましいが、この鉄滓の外観だけで技術的な判断をするならば、製錬技術は中世のものといわざるを得ない。

しかし、如何に石垣山でも直ちに豊臣・北條に結びつけるのは無理がある。ただ少なくとも江戸中期以降のものではないと思う。と付け加えておいた。

その後数日して放映された時には大幅にフィクションが加わってしまっており、小田原市教委の調査で現場に出向いた時は、製鉄遺跡らしきものは全く見当らず、当該鉄滓の採集場所を確認したに止まり、筆者としては内心忸怩たるものがあった。

しかし、本日当該鉄滓についての化学分析データならびに顕微鏡写真ができ、その結果では、

T・Fe	46.8%	(鉄分の計)
Feo	31.9%	(酸化鉄)
Ti	6.80%	(チタン)

であって、顕微鏡写真では明らかに生地フェアライトに不同不均一ではあるが、マグネライトが散っており、砂鉄を原料とし鉄を製錬した場合に発生する鉄滓であることが科学的に判断できた。

従って、当該鉄滓が、紛れもなく

その場所では採集されたものであるならば、例え遺跡が未発見でもその付近で早川付近の川砂鉄か海岸砂鉄を用い製鉄を行っていたことが考えられる。(五二年秋記)

金堀沢は鍛冶遺跡 でなく製鉄遺跡

相模湾沿岸には、静岡県下田市金山の金山遺跡は平安後期といわれ、伊東市宇佐美にも製鉄遺跡がある。湯河原町には鍛冶屋の集落に金山さんが祀られ、酒匂川河口の酒匂村には鍛冶分という遺名があり、山北町川西河内川沿いにタタラドと呼ばれる所があり、また、南足柄市にタタ

ラド製鉄遺跡が発見されている。窪田先生は、早川の製鉄遺跡については未発見ではあるが、酒匂鍛冶分の鉄材の一部の供給源は、早川辺になる可能性もあるのではないかと、また、さらに遡って千代国分寺建設鉄材の供給源などにも結びついてくるとは思えないかと考えられる、と興味ある話をされたことがある。

平安時代の木地挽の伝承、紀伊神社神宝のロクロ挽きの木地挽は、この地の製鉄によるロクロ製造の可能性を生み、木地挽の地名の現実性を裏付ける。皇地名の六郎石(ロクロ師)の現実性をもたらしている。

また、早川荘(牧)の農事における

鉄鋳の存在の裏付けとなるのではないだろうか。更に鉄鋳が、農事の能率を向上させたのではないかと、考えは飛躍する。早川河畔の平地部に耕地の広さをあらわす、五カ所の地名がある。すなわち、前平時、中平時、大平時、平時、奥平時の遺名は、鉄鋳によって開かれた土地ではなからうか。

それに、金堀沢の水もとから見つけた一塊の鉄は、金堀沢が『皇国地誌』に載る秀吉の小田原攻め時代の鍛冶遺跡でなく、早川荘(牧)の人々の生産に結びついた古代の製鉄遺跡であることを、我々に示していると思われる。

(了)

早川村の歴史の発掘に 立派な業績を遺された

青木友吉さんを偲んで

この号の「早川の製鉄遺跡」は、青木友吉氏の絶筆となった。『皇国地誌』「早川村誌」に載る「金堀沢」の誤った内容を指摘されたものである。

前号の早川・紀伊神社の三筋壺については、その年代を平安時代末であると紹介されたが、その用途は、経文を収めたも

のか、遺骨を入れたものか、判断できないとされた。

また、江戸時代の幕府の記録『徳川実紀』に載る、明和四年(一七六七)、早川村で綿実搾油が行われたことについて、裏付けを採ろうと努力されたが、これは稔らなかつた。色々、早川村の歴史の

見直しをされたが、その中で、特筆すべき素晴らしい業績は、昭和五十九年一月大観山と一夜城の中間地点に、御所山城跡を発見していることだ。

この戦国期の砦は、全く古文書や史書に載っていないだけに、美事な歴史の掘り起しだ。



在りし日の
青木友吉さん

この御所山城跡発見の端緒は、土地の人が、早川の奥山に人の手が入った所があるのを聞いてからである。初めは、古文書に載る「祢ふ川城」が、これに当るかと思っただけだ。

郷土史家の中には、古来の伝承・記録をそのまま鵜呑みにし、ときには、どうみても客観性のない自説を展開する人が往々にして見受けられる。

その点、青木さんには少しもその偏りが無かった。



城郭研究会員に囲まれて(御所山城)

史料や他人の論考を巧みに纏め、自分の説として発表するのではない。丹念に一つずつ当たった結果を元とし、どうしても、自分で分からぬ点があると、その分野の権威者の見解を求めている。それだけに、内容には一味違った趣を持っていた。

「風土記の裏付けを探っているようなものだ」と言う青木さんは、事実の確認のうえ、何故そうなっているか納得してからでない、次の段階に進まない着実さがあつた。反面、一つの事にこだわって、次に進み得ない事例があつた。

その一つに、明治初年の早川村戸長・鈴木銀次郎の例がある。銀次郎は、あとで鈴木姓を名乗り、再び鈴木姓に戻ったことを探求しようとしたが、果せずに終ってしまった。

平成五年十二月に発行の『社協はやかわ』に、早川地区に於いて金婚式を迎えた八組のご夫婦の名が挙げられている。

その紙面には、青木友吉さんが代表する形で、「結婚五十年を迎えての一文を寄せている。

終戦直後、昭和二十年にソ連の捕虜となり、謀者の罪によりハバロフスクの監獄に入り、重労働二十年の刑を受けた。囚われの八年間、腹五分目嗜好品なし、そして労働修行中の僧侶と全く同じ。そのなんともならない諦観の日々が、私の体質を変えてしまったようである。

過酷な外的要因は、生きるためには窮極的に楽天的にならざるを得なかった。このような過去を引きずっており、現在は、五反百姓でない四反百姓である。そして、早川村の埋もれた歴史をこつこつ訪ね歩いているが、残念ながらボケが始まっているようで、いささか淋しい限りである。

自分を飾り立てない青木さんらしい感懐である。

青木さんには、ソ連に抑留された体験を書き残されるのを、お勧めしたが、いつも返ってくる言葉は、「書きたくない。出来るだけ忘れるようにしている」ということだった。

青木さんの軍属時代の任務は、軍事機密に属し、一切外部に洩らさなかつたのは当然と考えられるが、現在になつては厳秘にして置く必要はない。「書きたくない」にしても、きつと、折りにふれ奥さんにはソ連抑留時代の辛い労働に耐えて来た経験を共に語つたに違いない。

そう思いながら、この文を記すに当って、奥さんの君子さんに、この事を尋ねたが、青木さんは、奥さんに、軍属のときの思い出もシベリア抑留の出来事も殆ど語っていなかった。

とき折、私の家に早川村の史料のコピーを持ち込んで解釈を求められる。私には判らぬ点が多いので、関連する書籍や辞典を持ち出して参考してもらつたが、それは、いつも半日に

及ぶのが常だった。しかし、在満時代の活躍も、ソ連抑留の辛苦は語ることなく、私が聞くので、ようやく話し出す始末であった。それも断片的な内容で、その年月も明らかでなかつた。

ところが、青木さんが略歴を遺されているのを知つた。おそらく、復員後、軍人恩給を請求する折にその履歴が必要で、それを元としたものと思われる程に簡単なものであつた。しかし、それでも、青木さんから聞いた話を繋いでゆくには、参考となつた。

青木さんが、子供の頃から関心を寄せてきた早川の歴史を、実際に手掛けるようになったのは、六十三歳の昭和五十一年のときからのこと。その期間は、僅か二十年足らずであるが、前に挙げたように、幾つか早川の歴史に新しい光を当てたのである。

「惰農でして……」と控え目に言われる青木さんの早川村史研究は、農の営みと共に始まつた。

農業は、長兄が放棄したミカン畑を継承したものが、既にミカン栽培は斜陽

で、二人の子息が大学に在学し、教育費が一番かかる時期に当り、生活は楽ではなかったと思われる。

しかし、敗戦時と共にシベリア抑留の辛苦の生活を余儀なくされた青木さんにとっては、ものの数ではなかったのかもしれない。

※

青木さんは、廿歳の昭和八年、徴兵検査で甲種合格。当時、在満兵力が増強されつつあるとはいえ、甲種には、背丈に優り体重があり、筋骨が遅しければ合格しなかった時代である。青木さんの一七二cmの身長は、若き日のそれを物語っていた。

翌九年一月、現役兵の工兵として、東京中野の電信第一連隊に入営、固定無線隊に配属され、無線電信の教育を受けた。

現役兵の多くは、歩兵としての教育訓練を受けるのが普通であるのに、電信連隊に回されたのは、青木さんに通信の下地があったからである。

昭和二年三月、県立小田原中学校を一年で中退、四月に東京鉄道局電信科に入所した。身分は雇員であっ

た。

入所の経緯については、奥さんの君子さんは、次のように語る。

当時、早川の駅長さんが、毎日のように主人の家を訪れては、両親を通じて、鉄道に入るのを勧められたようです。

主人は、復員後、小田原中学をやめて鉄道に入つたのを悔いた事が一時ありました。

鉄道での通信技能の修得は、青木さんの半生に大きく影響を与えることは、自身、夢にも思わなかったであろう。

ところで、鉄道省管轄下の官庁企業である鉄道に入れば、本人の努力次第で、雇員から官吏の身分の判任官に昇任でき、その身分を示す丸いバッヂを、制服の詰襟につけるようになる。そして、定年後は恩給が受けられ、余生を安泰に過ごすことが出来た。しかも、駅長・助役に昇進する道も開かれている。

早川駅長は、このようなことを話をして、鉄道入りを勧めたのであろうか？

当時、進義務教育の小学校高等科二年を卒業すると、男子は、丁稚・小僧の修業を経て、商人か職人の道を選んだ。家業を継ぐ長男でも、「他人の飯」を食べさせなければと、丁稚修業に出された時代である。勤め人としては、足柄地方では、鉄道員か平塚の海軍火薬廠工員としての職が最高で、さ

もなければあとは、京浜地区に出て工場の職工となるしかなかった。ともかく、鉄道は、縁故がなければ就職出来ないといわれ、非常に「窄き門」であった。それを駅長は、資質ある適格な人物を鉄道局に推薦できる立場にあった訳だ。青木さんは、それに相応しいとマークされていたのである。

ところが、青木さんは、昭和五年五月、東京鉄道局を退職している。その理由を、略歴に脚氣・ノイローゼと括弧書きしている。V B₁の不足による脚氣は、当時、ありふれた病氣と一般に考えられていた。ノイローゼは、戦後の言葉で、

当時は神経衰弱と呼ばれた青年期特有の気塞さがりであったらう。その後、軍隊

に入営する迄は、家業手伝いとある。

青木さんは、演劇活動に熱を入れ、特高に睨まれて逃げ回ったことがあると、ちょっと洩らしたことがある。野良仕事を手伝っている昭和六年頃かと思われる。当時、社会主義思想にかせてグループで知的活動をする青年が、小田原地方にもあり、警察に検束される例を幾つか聞いている。

昭和十年十一月、二カ年間の兵役が終り、現地除隊し軍属となる道を選んだ。一応、帰国して三カ月休養すると再び渡満した。奉職先は、関東軍築城班で、雇員として通信業務を担当した。

当時、国民の眼は、大陸に向けられていた時代である。次男で独身という気軽さと、二カ年間の在営期間中、腕を磨いた通信の特殊技能を通じて、直接お国のために尽す、という思いがあったからだった。

更に、昭和十二年十二月になると、関東軍別班勤務となり、対ソ情報収集の任務に就くこととなった。別班というのは、特別情

報隊別班の略で、固有有名であるかどうか、青木さんに尋ね損ねて分からないが、通称は満洲第一八八部隊と呼ばれ、本部は関東軍司令部内に置かれた。軍人・軍属合わせて約三十名の小人数ながら、中佐を長としていたところを見ると、独立大隊程度の格が与えられていたと思われる。

陸軍では、情報収集の仕方、天候、音情、地情に分けていた。天候は敵の軍用電報を盗聴し、音情はラジオや公の発信をとらえ、地情は特務機関がスパイを放って敵情を探るのを、それぞれ任務としていた。

満洲には、天候が六カ所置かれていたが、青木さんが挙げたのは、新京・ハイラル・チャムスの三カ所であとは、思い出されなかった。

盗聴は、トン・ツウのモールス信号の暗号化された敵の軍用電報を捉えるのだが、まず、方向探知機でその発信地を捜す。

しかし、具体的に、その場所を認定するのは大変なことであった。相手は、その所在を秘匿するため、しばしば周波数

初年兵(電信第一聯隊)の頃の青木さん(左)



と呼出符号を変えてくる。発信も、夜昼を通じて間をおき、継続してではない。それに相手の発信先は一カ所ではなく、空軍は独自の通信網を持ち、国境警備隊は固定無線を用い、師団は状況によって発信するなど、複数を相手の盗聴であった。

馴れるに従って、相手の電信手の通信する癖や、その構成員の数、それに、通信機が発する特有の音色を聞き分けるようになり、発信先を素早く認定することが出来るようになった。

しかし、相手の電波が急に増加することがある。それは、事を起こす前兆とは限らなかった。しかし、相手の電波に、かまけていると、ひよっと本物の情報

流す、陽動作戦で、わが方を攪乱する戦術であったために少しも気が抜けなかった、と言う。

ドイツが近隣諸国を頻りに侵し、併合や占領を続けている時期には、それに対応するソ連側の情報をとっていた、と言われるから、昭和十五年から十六年にかけての事であろう。なかでも、ソ連の「戦備につけ」という発信を捉えたのは、独ソ戦が勃発した昭和十六年六月の事であったろうか? ノモンハン事件で、ソ連の飛行機が集結しつつあったのを、わが軍の飛行機が爆撃して、ソ連機に大損害を与えたことがある。そのソ連機集結の情報をとらえたのは、「私である」と語

る青木さん、日頃、自慢しなげに二度聞いたことがある。調べてみると、ソ連機の集結は、トムスクで昭和十四年六月のこととなる。

ノモンハン事件の始め頃(昭和十四年五月十一日勃発)は、関東軍司令部それ自体が情勢が分からず、参謀に「お前ら別班の活動は、二箇師団の働きに匹敵する」と、褒められたことがあると言う。

昭和十八年九月、青木さんは、雇員から判任官の陸軍技手に昇任し、満ソ国境近くのハイラル勤務となった。ハイラルの天候は特務機関内に置かれた。

青木さんが結婚したのは、この年の十月である。妻の君子さんも、同じ早川出身で、結婚前、小田原駅前のレストランに勤めていた。その頃、川崎長太郎に片思いをされ、同じ職場の友を通じて恋文を届けられたことがあった。君子さんは、見向きもしなかった。

名されていた。

長さんは、小説に、青木さんを、協和服を来た満鉄社員で、丈も豊かな好男子で、とても立ち打ち出来そうもない相手として書いている。長さんは正直なもので、事実そうなのだが、長さんは、青木さんを知ってはいない。おそらく、君子さんと共に渡満のため小田原駅から旅立つ様子をじっと遠くから眺めていたに違いない。そして、軍属の服装を満鉄のそれと見間違えたかも知れない。

君子さんは、松竹大船撮影所の池田信政映画監督から女優にならないかと言われた程である(このことはご主人から聞いた)。その頃、小田原でロケが行われ、上原謙、佐分利信、高峰三枝子らが共にやって来て、その日の撮影が終わるといつも駅前のレストランに立ち寄った。その折のことだった。君子さんは、からかわれたのかかと思ひ、意に介しなかったという。ともかく、君子さんは、七十五歳に達した今も、その美しい面影を控え目な仕草の中に残している。

構えた。

※

ソ連が侵攻してくるちよつと前のことである。満洲里前面のソ連のトーチカが、今迄閉ざっていた扉を全部あけた。「面白そうにやっているな。虫干しかも……」と、おちゃらかしていたが、ソ連が戦闘開始の準備をした情報を入手、新京から参謀が飛んできた。「口助の第一号戦備、その後の情報をとれ」と言うがとれない。師団長は、別班の存在を知らない。情報源がどこから出たか知らなかったのである。

……………

八月九日、午前六時十五分頃、君子さんは、起きぬけに異様な重苦しい地響きに、外に出てみると、丘陵の東山官舎より川を隔てた遙か彼方の市公舎に、黒煙りが立ちあがっているを見た。ソ連軍機による爆撃だった。夜勤明けで休んでいた友吉さんは、すぐさま部隊に駆けつける。君子さんは、誕生日をむかえたばかりの長女を抱いて、防空壕に潜り込む。恐ろしさで時間の経過を忘れていた。

夜になると、軍人・軍属

の家族に避難命令が出て、貨車で、陸軍病院の衛生兵と共に、ハイラルから脱出することになった。途中、貨車が動かなくなり、線路伝いに無我夢中で歩いた。ハルピンに到着したのは十五日で、電々公社の建物に避難し、ハルピン居留民団の救援を得た。

一方、友吉さんは、部隊と共に行動するが、撤収命令が出たのは、翌日以後のこと、夜陰に乗じての脱出行で、爆撃で凸凹となった野山を越え、蚊の大軍に襲われ、外套の上から刺されて悩まされた。昼間、山中で小休止をしていると、敵機から銃撃を受け、大木の幹を盾に、ぐるぐる逃げ廻るが、敵は向きを変えて執拗に射って来た。夜間の興安嶺の脱出行で、ハルピンに到着したのは八月十八日のこと。そして、電々公社で、君子さんと再会した。

だが、それも束の間、日本軍の降伏で、友吉さんは捕虜となり、牡丹江まで連行されることとなった。

その頃、国府軍と中共軍の内戦で、電々公社は国府軍が司令部を置くことになり、君子さんら難民は、特

務機関の建物に移った。ところが、長女は栄養失調のため、九月六日、君子さんの腕の中で息を引きとった。一歳一カ月の短い命であった。君子さんが、中国の胡蘆島から博多に上陸したのは、一年後の昭和二十一年十月のことになる。

一方、友吉さんは、シベリアに送られることとなった。が、八年間にわたる抑留生活のことは、ほとんど語らない。嫌なことだからで出来るだけ忘れるようにしている、というも無理ないことだ。略歴には、

昭和二十年八月

ハルピンにて武装解除。ソ連捕虜。極東軍軍事裁判にて二十年の刑、

ソ連刑法五百八十七条

六項の一

昭和二十八年十二月

復員

と、記すだけである。

この簡潔な表現の中にはソ連が、一方的に自国の法律を援用して、情報収集を国家への反逆として刑を適用する、勝てる者の手前勝つてな姿勢が浮彫りされる。青木さんは、抑留中の出

来事で、いい思い出は、一つもない、と言う。

ソ連は、日本の軍人・軍属を捕虜にすると同時に、スパイを入れ情報をとった。

軍人・軍属の中には、民間人と一緒に帰った人もいる。チャムスの別班は、早く帰った。大所を壊らなかつたからだ。ハイラルの別班は、一網打尽にやられた。ハイラルには気骨ある将校がいなかった。上司が先に白状してしまったため。白状させるため、中腰のまま箱の中に入れられ、一

晩中、閉じ込められたことがある。しゃがむことも座ることも出来ない中腰のままで非常な苦痛な拷問を受けた。

私は、ラーゲルを十八カ所も転々と引き回された。私が白状しないものだから……。誰か私の顔に見覚えがある者が、いないかと回したと思う。

しかし、白状しなかつた。一カ月監獄入れられたのち、重労働二十年の刑と宣言を受けた。監獄には、将官・佐官級の人や、旧満州国皇帝以下の要人がいた。薄儀はだらしのない男だったが、

薄潔は立派だった。二十年の刑が短縮され、昭和二十八年の暮に復員出来たのは、スターリンが死んだためである。

註 スターリンが死んだのは、昭和二十八年三月五日。

最近、ハバロフスクのラーゲル第十六分署で、偶然友吉さんと出会った早川西組の青木秀雄さん(東組に、本会会員で同姓同名の方がおられ、食堂を経営されている)に、お会いする機会があった。

二人の出会いは、ラーゲルの食堂であった。全くの奇遇であった。隣り合わせでも始めは、互に全く分からなかつた。無理もない。秀雄さんは、友吉さんより十以上も齢下で、その上、友吉さんは、早くから満洲で働いている。互に顔を覚えていない。出身地を尋ねているうちに、同郷でしかも隣組であるのが分かった、と言う。

秀雄さんによると、第十六分署は、ソ連が一般の捕虜と刑罰を加える捕虜と区分けする所で、友吉さんは、内部告発で、これから裁判

にかけられるところであった。そして、監獄に入れられることになるが、出会いが、そのまま別れとなった。それは、昭和二十三年の春のことだという。

奥さんは、友吉さんが抑留中の昭和二十三年に寄せられた、俘虜用郵便葉書を大事に保存している。文面は、横書きの片仮名で記されているが、読み易いように、漢字まじりに替えて記そう。

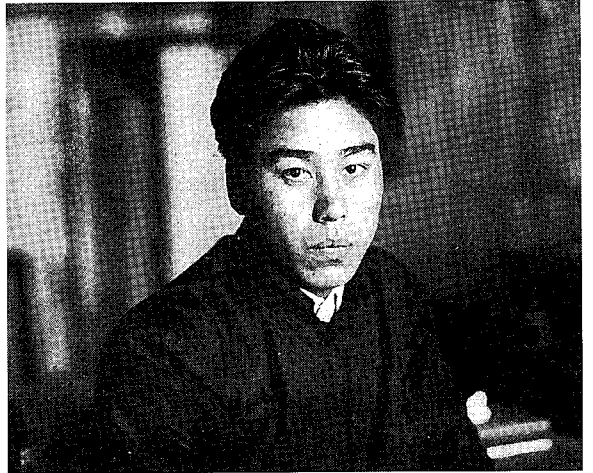
ウラジオストック郵便箱

41 勤勞ノ喜ビヲ知ル春三歳
三回目ノ正月ヲ無事楽シク迎ヘタ。六月ノ緑ガ相
変ラズ私ヲ慰メテクレル。

アナタモ随分苦勞サレテ
オラレルコトト思フ。闇
ヤインフレデ暮シニクイ
コトトオ察ツシ致シマス。
充分体ニ氣ヲツケテ、頑
張ツテ下サイ。今年中ニ
ハ再会出来ルコトト思ヒ
マス。

齡トツタ両親ヲヨロシク
頼ム。早稲田(早川の
小字)ノゴ両親ニ呉々モヨ
ロシク伝言頼ム。
一ニ頑張ル、二ヘコタレ
ナイデ欲シヒ。

関東軍築城班勤務の頃



湧いた日本経済も、この年の二十八年七月の停戦協定の成立と共に萎んでいった。新しい勤め口を捜すのも容易ではなかった。

だが幸いにも、義姉が東京で経営するブラウス製造の相模商會に就職、シベリア抑留の空白を埋めるべく

昭和二十八年十二月末、舞鶴港に上陸、祖国の土を踏んだのは二十年ぶりであった。眼にしみる麦の緑と、まばゆい程の日本の女性の美しさに、初めて祖国に生還し得たのだという、感動と喜びを味わった。

再出発……。四十歳。まだ再起できる年齢である。青木さんは、文筆生活をしたいと奥さんに伝えた。しかし、それで生活できません、という答えに、友吉さんは諦めた。

昭和二十五年六月、朝鮮動乱の勃発で、特需景気に

働いた。常務として經理・人事を担当、従業員百三十名に達する会社に成長したのを見届け、退社。以後前に記したように、農業に従事しながら早川村の歴史を発掘し続けた。

しかし、シベリア抑留を記録に留めることを勧めても、その気にならなかった。「辛いことだらけで、出来るだけ忘れようとしている」という言葉は重い。

青木さんは、優しい心の温かい持主だった。一歳一カ月の長女が、抑留中の家内の腕の中で息を引きとっ

ていった、と思うと、とても不憫で、とても書く気にならないと、言ったことがある。奥さんの話によると、結婚して以来、一度も言い争ったことが無かったという。それに歴史の話はよくしたが、どちらかという

と寡黙の方で、それに酒席が苦手だった。しかし、その席を避けようとはしなかった。いつも酒呑みの話を聞き、ときに介抱役を勤めた。青木さんは人のためにもよく尽くした人だ。

早川漁港が完成したとき、道沿いにちよっとした空地があった。青木さんは、海辺が無くなった素漠とした風景に潤いを持たせようと、早川に立派な歌人がいるから、その歌碑を立てようと、地方事務所を通じて長洲知事に申請した。歌は、鈴木貫介氏の二首が提出され、歌人の長洲知事が選ぶように託された。すると、申請してから許可が下りる迄一週間という早さで、しかも、港築造の折、掘り出された石を碑に利用するように配慮が加えられた。

また、青木さんは、地域のために骨を折った山口武利県会議員の胸像を漁港内

に建立しようとして申請をしたが、これは、認められなかったという。

一九九一年(平成三年)十二月二十五日、ゴルバチョフ大統領が辞任を表明し、ソ連邦が消滅し、東西冷戦が終結を告げた。

青木さんは、このとき、「俺の青春は何んであったのか……」と、口にした事がある。

青春時代、お国のためと黙々と縁の下の力持ちをしたことが、空しく思えたのである。

おそらく、敗戦のときには、そのような思いが、なかったであろう。ハイラルからの命懸けの脱出行。捕虜となつては、敗れた口惜しさを、諦めの中に沈め、募る望郷の思いに、生き抜くことで、空漠とした思いが生まれるゆとりは無かったに違いない。

しかし、青木さんの青春時代の経験は、決して徒勞でなかった。早川村の歴史の掘り起こしに見せた、その綿密な、実証的な手法は、在満時代に培った体験が生かされたのだ。

青木さんは、昨年の夏過

ぎから入院を繰り返した。そして、肋膜炎から水を採るようになった。奥さんは、肋膜炎だから、そのうち必ずなおると、言い続けた。

「もし、病気が治ったらどのくらい生きられますか」と、青木さんの問いに、病院の医師は、

「平均年齢をとうに越えているから、あとは寿命次第だね」と答えたという。

最後まで、奥さんや家人は、肺癌であるのを告げなかった。しかし、青木さんは寿命がない事を知っていた節がある。私が貸した本が、その俣になつていて、その書名を確かめるように、尋ねたことがあった。亡くなる二カ月前のことである。最後に病院を訪れたとき青木さんは、酸素を吸入したまま目を閉じていた。私の気配に気付いたか、寝たままに右手を挙げて、指を動かして合図をした。別かれの積もりであったろう。三日後の昨年十二月十六日午後八時十九分、八十二歳の生涯を閉じた。(岡部忠志)



小田原叢談(四)

石井富之助

道徳教会

明治三十七、八年(一九〇四、五)の日露戦争が終つて後、政府は勝利に酔いしれて心おごり、浮薄に流れた人心をひきしめるために社会教化運動を強力に展開した。

ちょうどそのころに小田原に道徳教会という会が誕生した。

図書館に財団法人道徳教会の発行した「創立拾年の霜痕」ならびに大正六年、七年の会務報告の三冊が保存されている。これは当時道徳教会の事業に参画された人で、小田原町立高等女学校の教頭であった三浦経太氏が持ってきてくれたものである。

この中に道徳教会創立の経緯がくわしく述べられている。

明治四十年の晩秋日本
弘道会小田原支部会員

の月次研究会の席上、

たまたま同会員であつて足柄下郡長に赴任してこられた石川疎君が

臨席され、聞くところによると当地には報徳社員があり、各宗教家

諸氏及び教員員があつて、互いに自分の職分とするところに日夜努力されているという。

今や戦乱の後風教を起こして人心のおごりを制することは急を要することである。よろしく各自がその小さい領域を脱して、国民道徳

涵養という目的に向つて歩調を一つにされるよう望む。

なるほどそのとおりだといふことで数回にわたつて協議した結果、大同団結

することに於て十二月八日宝安寺でその発会式が行わ

れた。道徳教会という名は当日講師として招いた大内青巒氏の命名するところ、弘道会の「道」、報徳社の「徳」、宗教教育の「教」の一字ずつをとつたものである。

このように小田原各界の有識者を集めて発足した道徳教会は毎月例会を開き、あるいは東京から著名な講師を招いて特別講演会を催すなど、活発に社会教育活動を展開した。

ところで、その経費はどうなつていたかというところ、通常会員の会費は一月五錢、一か年金五十錢となつていた。もちろんこれだけでまかなえるはずはないので積極的に寄付を求めた。

もともと、この道徳教会は小田原の素封家辻村甚八家が一家を挙げて関与しており、会員が当時の有識者を網羅して、しかも事業が社会教育なのだから、賛成者、支持者も多く、本光寺住職三宅日鐘師が五か

年間に三十円を寄付するという申し出をしたのを皮切りに、鈴木善左衛門氏は四たびも重ねて三十円ずつを寄付している。

こういふわけでおそらく

寄付金が一千円に達したのであろう。明治四十五年(一九三二)六月三日付で、井上宗道、石井伊兵衛、本多行蔵、高木快雅、尾崎春彦、添田理平治、村山大仙が連署し、内務大臣原敬、文部大臣長谷川純孝あてで、財団法人設立許可申請を提出し、同九月十六日、設立の許可を得た。

財団法人となつた道徳教会はさらに活発な活動を開始したが、その中で特に紹介しておきたい二つの事業がある。

その一つは辻村文庫の開設である。

これは陸軍大将西義一氏の嚴父で、北海道浦河支庁長時代に地方民から生存中に神としてまつられたという西忠義氏が「時代の要求する図書館をここに付設して社会教育の欠陥を一日も早くおぎなわれるよう。」と要望したのに始まつている。

道徳教会の幹部もかねてからこのことは考えていたことなので、辻村靖兄氏に相談してその助力を要請した。辻村氏はこの計画を喜んで受け入れ、万年四丁目(旧一丁田、現本町二一四)

の屋敷と倉庫二棟、それに図書閲覧室を新設して、無償で道徳教会に貸与した。

こうして大正二年(一九一三)四月二十日、財団法人道徳教会図書部辻村文庫と称する私立図書館が誕生した。

それから三年後の大正五年に公立として最初の足柄下郡立図書館ができたのであるから、民間の方が一歩先んじていたわけである。

もう一つは小田原商工補習学校である。

これは大正七年(一九一八)七月、陸軍少将木全多見、獣医学博士今泉六郎、道徳教会理事代表高木快雅の三氏を発起人とし、一丁田の青年会場内に設けられた商業の補習夜学であるが、これが後に相模学園小田原商業学校となり、市に移管されて小田原市立商業学校、さらに県に移管されいくたびかの変遷を経て、現在の県立小田原城東高校になつているのである。

辻村家並びに道徳教会が小田原の教育史上に残した大きな足跡は今もなお歴然と続いているといつてよいであろう。



材木屋綺談 その21

たかた・きくせん

具、各種器物の木部部品として、あらゆる分野で利用された。

それは、ラワン原木の蓄積量が無尽蔵に近いと思われて、価格が大へん安かったからである。その上、ラワン原木は、直径が二メートルもある巨木が多く、材質も日本産の杉や松とちがって節も無く、その製品は、ピンク色に美麗、硬度も適当に硬いので細工が楽である。殊にベニヤ製造技術の進歩のお陰で、吾輩ラワン

木材に
関係のな
い人でも
今ではみ
んなが吾
輩の名を
知ってい
る。

日本が
戦争に負
けて焼野
原になっ
たとき、
吾輩は、
その復興
用材とし
て一番に
駆けつけ
て日本の
住宅、家

る。最近洋間が多いが、洋間の内部造作は、全部ラワン材を使っている。建物だけではない。書棚も洋服タンスも、ラワン材をふんだんに使っている。家具類は、表面は綺麗に見えるが、すべてラワンベニヤを下地にした化粧材である。

このように諸君の身边は、吾輩一族によって取り巻かれているのである。この吾輩が、日本に姿を見せたのは戦前にも多少はあったが、大量に輸入され普及して行っ

ベニヤの利用分野は爆発的に拡大した。

いま試みに日本人家庭における吾輩の活躍ぶりを、三四の例をひいて描いてみよう。まず、諸君の家の屋根下地はいまではほとんど耐水ベニヤが使われている。床板も六ミリ厚の耐水ラワンベニヤである。洋間ならばラワン科のアピトンフローリングが使用されている。内部の壁面も漆喰でない処は、全部ラワンベニヤである。押入の羽目、天井、床板みんなラワンベニヤであ

**吾輩はラワンである
生まれは南洋ボルネオ**

たのは戦後である。日本国が高度成長期にかかる頃から、日本の商社は、競ってラワン巨木の生える南方マレー半島やボルネオへ押しよせ、海岸に近い処から伐りはじめて次第に奥地へ進んだ。吾輩たちは群生はせずジャングルの各所に聳立する独立樹である。戦後日本の経済は貪欲で、その尖兵である商社は、吾輩の一族を伐りつくして行った。やがて、東南アジア諸国が成長してくると、商社の伐り放題も終局を告げ、いま

では原木のままでは、輸出せず現地製材して輸出するようになっている。

吾輩憶うに、日本におけるワラン材の普及は、ちょうど石炭が石油にとって替わられたように、資材革命と呼んでも過言ではあるまい。それにしても数百年をかけて成長した吾輩たちを、丸坊主にした日本経済の貪欲さは怖るべきものであった。又、これに一部携わった材木屋の罪も、決して軽くないと思うのである。

たのは戦後である。日本国が高度成長期にかかる頃から、日本の商社は、競ってラワン巨木の生える南方マレー半島やボルネオへ押しよせ、海岸に近い処から伐りはじめて次第に奥地へ進んだ。吾輩たちは群生はせずジャングルの各所に聳立する独立樹である。戦後日本の経済は貪欲で、その尖兵である商社は、吾輩の一族を伐りつくして行った。やがて、東南アジア諸国が成長してくると、商社の伐り放題も終局を告げ、いま

(続)



小田原市立三の丸小学校新築成る (平成7年12月28日)

丹沢の植物

②7

城川四郎きがわしろう

この「シリーズ」②でご紹介したウチョウランに近縁の植物に、ヒナチドリという植物がある。ウチョウランにくらべ葉が広く、花もやや大きくて花色も派手な印象を受ける。ウチョウランよりもはるかに個体数が少なく、珍奇な植物とい

うことができるだろう。三十五年前に丹沢での記録があり、当時からわたしも心がけていたが、出会う機会に恵まれなかった。県内の研究者たちも、もう絶滅したのではないかと話しあっていたほどである。山草マニヤや園芸業者に見つかれ

ば、たちまち根こそぎ採取されて、絶滅するだろうと考えられたからである。

昨年、丹沢植物調査団の一員として行動中、この幻の植物が、見事な花を咲かせているのに対面することができた。わたしたち研究グループのメンバーは歓喜し、三十五年ぶりの確認に深い感慨を覚えたものである。文献上では分布確認地として宮城、栃木、静岡、福井、紀伊半島、山口、高知が挙げられている。恐らく全国的に分布しているに違いないが、個体数が少ないために、なかなか発見さ

れないのではないかと思っ

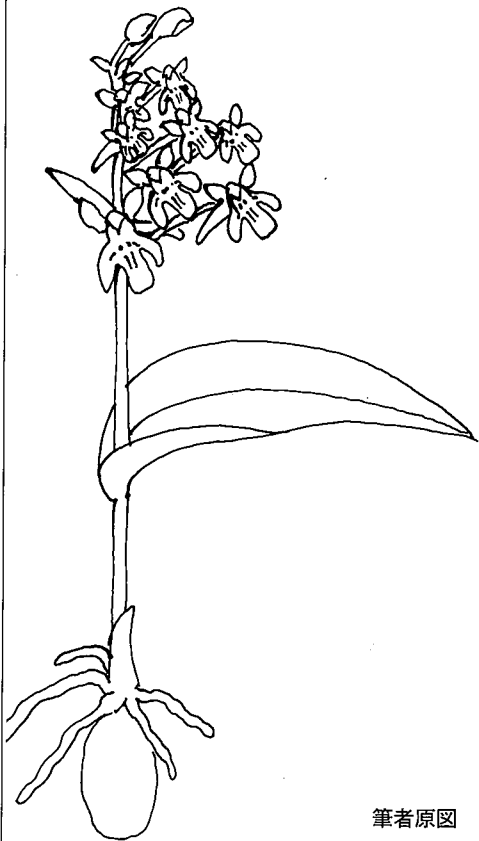
ている。この「シリーズ」⑧でご紹介したフジチドリもそういう植物の一つである。ラン科植物のなかには、芝生に雑草なみに生えてくるモジズリのような種類もあるが、一般には個体数が少なく、ひそやかに高貴の雰囲気を漂わせているものが多い。面会するには足しげく山に通って、幸運な機会を期待するしかない。

ヒナチドリは雨量の多い山地を好み、コケの生えた樹幹に着生する。高さはぼ一五糎、ピンクがかかった紅紫色の可憐な花を咲かせ、葉は一枚である。まれに白色品もあるという。

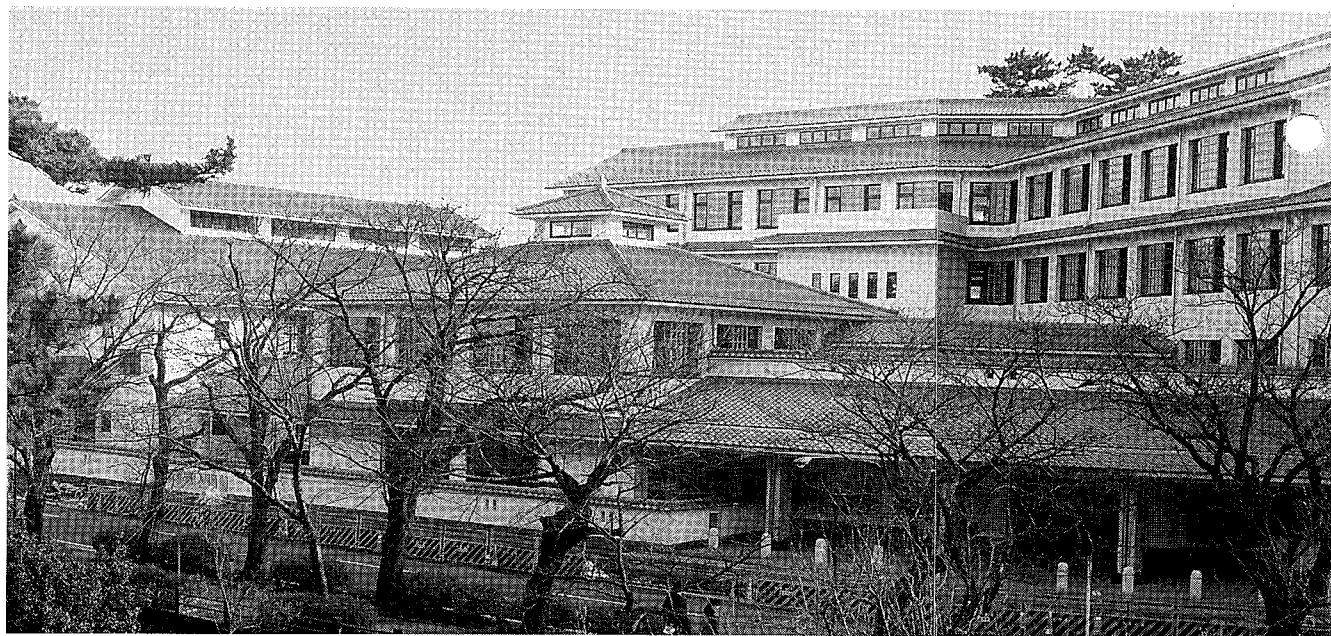
(続)

ヒナチドリ (ラン科)

Ponerorchis chidori ohwi



筆者原図



震災日記

5
6

片岡永左衛門

大正十二年

十月九日 曇

四時頃目を覚むるも疲労を覚え、また眠る。

六時に起き出したるに、空は曇りたるも雨は止みたり。又、草鞋にて出ずれば昨日と変らず都の大路も泥濘甚だし。

東京駅より乗車し横浜にて下車す。停車場は焼失し仮小屋なり。此処も泥濘し東京と変らず。自動車に乗り、左右の惨状を目撃して亀ノ橋にて下車、河本通りを歩行すれば、むかつくも少しは見ゆ。

高田は、バラックの準備も少しは出来しかと思ひながら、焼け残りの車橋際の心当りの大きなバラックの普請場を覗き見しに、判然せざれば(はっきりしないので)、未だ、バラックにも着手せざるかと、少し失望と不安の念を生じ、その隣地の焼場に働き居りし者に尋ねしに、いま覗き見

しバラックと聞けば安堵し(安心し)、いま見れば、安兵衛も居り、商品も倉庫に着したれば、いま四、五日にて無理にも開店と聞きては心より嬉しく、同行して避難先石川小学校に至れば、教室にて畳も敷きあり、立退所としては最良の方なり。

先日、親一(片岡永左衛門長男)の来りし時は、余り元氣にも非ずと聞きし尋子も元氣よきと。売掛ある得意先よりは、売り代を持参し見舞に来たりて、商品の注文も有れば、可成一日も早く開店なしたくも職工拂底にて、毎日一人より来たらずなど談笑の内に、持参の握り飯を食し、市内の焼跡を徒歩し、一時十四分に乗車せしに、非常な雑踏にて、大船迄立ち続け、馬入川の東岸にて下車し、徒歩にて仮橋を渡り、馬入にて三十分ばかり待って汽車に乗る。

国府津より自動車にて、酒匂川の東岸より徒歩し、土手より見れば、広き川原

を流る、数条の川水に架したる橋と橋の間は屈曲し、通行人の自由に歩行したれば道も数条となり、これにては昨夜未明に迷いたるとも思いたり。帰宅せしは五時。疲労したれば食後直ちに床に入る。

十日 午後より降雨

午後より雨となり、転々風も出たれば、雨戸を引きたれば、無聊に寒気も加わりたれば床を伸べて仮寝す。食後も、れいなく床に入る。

十時頃は、風雨甚だしく、屋根を打つ音に夢をなさず、十二時頃よりは、雨は晴れたるも浪高く、海岸近きに居住の被害者を思いやりなごするうち浪の音もいつか聞こえずなりて夢に入る。

十一日 晴

震災に就いては、種々の事もありしが、当春、古道具屋にて面白き様なる反古ありと聞き行きてみれば、箱根関所に関せし記録、その他大久保時代の制度等なれば買取り、関所に關するは、箱根において箱根文庫を設立するなどの説もあれば、その時に寄贈することとし、尾崎亮司に托し、同

家にて震災に焼失したるに、この震災にて自家は、倒壊し雨水に破れし唐紙(ふすま)の下張りより箱根関所手形数十枚顕れたれば、この家は、元は以前箱根関所の番士鷲尾氏の家を買ひ取りたれば、その家に在来の唐紙にて、同人の談話に、箱根関所取り潰しに際し、書類は在番人にて分け取りしと聞きたれば、その古手形を下張りにせしなるべし。その内にて全備数千枚数種の手形を不思議に発見したるも震害の恩恵とも云うべきか。

十二日 雨

この程、石橋(小田原市)の者の談話に依れば、過日震災にて、聖ヶ嶽の頂辺の崩潰し、その山嘯のため、根府川は一部落殆ど全滅となり、聖の崩潰跡は二個の池となり、大雨のためもし破潰するとせば、石橋は、根府川の如き被害を受くべしと、未だ不安の日々暮し居れりと。

十三日 晴

午後より上京せんと、自動車にて酒匂にて下車、仮橋を渡り中程迄至りしに

俄かに落橋し、危なき場所を逃げ戻りしに見るに、二人河水に流され、一人は救われ、一人は遂に見当らざりし。早速、落橋を危ふく飛び渡りし瞬間、警戒の兵士は、通行を禁じたり。

川端よりまた自動車に乗り国府津より汽車、馬入を徒歩し、四ッ谷に着きしは午後七時にて、平常より倍以上の時間を要し小遣い少なからず。この辺、近々震災気分も薄く、男女の服装も最早平常と異ならず。

十四日 晴

七時中野参拜、九時帰宅、十一時に立、見事な大根有れば重きも厭わず三本と鐘詰を貰い来りしは、震災気分なり。十一時十分東京駅より乗車、藤沢駅にて行員と出逢したため、馬入・酒匂の徒歩も重き荷を持たせ幸を得たり。途中雨となり五時帰宅。

十五日 雨

震災以来は、老若男女共に総て驚愕(大きな驚き)と困憊(苦しみ疲れる)のため疲労憔悴(やつれる)し、顔面は皺を生じ漆黒になり、知己(知人)も見迷

う迄となり、諸人の風俗も全備するなく、羽織は勿論破帽破衣に細帯をし長衣する者なく、男女共に尻を端折り緩歩する者なく、平常なれば異様の姿にて、通常の服装なすは反つて他人に恥の有様なりしが、昨今は人の顔色も幾分回復せしも、服装には未だ震災気分充実せり。

十六日 晴

今度の震災には種々の出来事も有りしが、往年、伊藤(博文)公に揮毫を頼みしに、自作南湖詩 蕭條潰跡涙空零 虫語鳥聲聽不忍 白雲半露觀音寺 紅葉深藏共榮亭 を与えられ珍藏せしに、去る八月、表装修理に東京の経師原千代吉に遣わし置きしに、今に何の消息なし。焼失したるなる可し。孫の圧死に比すれば惜しきと云うも愚かなれども惜しき事なりしが、大橋乙羽氏(書肆博文館主)が、この書幅を拙宅にて見たるを記載せし自著の「千山萬水」も同時に紛失したり。なお、残念に堪えざるは、明治陛下の東海北陸御巡幸に際し、行在所の札と皇后陛下行啓の御泊の札は、家

宝として安全のため、親類関小左衛門の土蔵に預け置きしに、同家は一家六人の圧死者を出し、土蔵家屋は焼失したために、焼失せしなり。

残念の中に嬉しかりしは、北條落城後一時、芦の湯に移り、その後また、小田原に移住し時に持参せし唐櫃(かまぼこ)有り。蓋の裏面に元和二年(二六六)と記載有り、拙家唯一の古器物なりしに、震災に破潰せるなるべし、その姿も見えざりしに今日に至り、箱は片々に破れ、蓋のみ出たり両片となりしも、合すれば年号も判然たれば、千里の馬骨(千里の馬一千里も走るすぐれた馬)とその俣に所蔵とせり。

町長今井廣之助は、任期満了の処異議者有りしも時局のため再選せらる。

十七日 晴

午後より倒潰の善後策のため、高井作次郎同道大蓮寺に至り、本堂・庫裏等の処分を相談す。今回倒壊の本堂を佛具等の取り出しのため発掘せしに、その物什物帳にも寺伝にも在らざりし、蓮台共々四尺余りの木彫り阿弥陀の尊像を発見せ

しが、足部に焼痕有るより推考すれば、弘化年間(一八四四)に本堂の火災に遇いたる時の本尊にして、その際には、灰中に埋没せしを焼失と誤り、新たに今の釈迦如来を本尊にせしものか、果たして然れば、火災中に没し震災に顕れし不思議な尊像なり。

十八日 晴

例年より暖気にて余震未だ止まず。人々不安を感ず。震災につき木材騰貴し、凡て三割五分を騰貴し、目下の相場は柱本分貳拾五円なり。災後物資は、総て一般に昇騰せしも、九月初旬に関西より仕入れし物は、交通不便のため運賃多額となり、利益なく損失せしもの多しと。

震災以来掘端(城址公園)に、焼トタンを屋根としたる差し掛けをなし、井飯屋、手軽の飲食店一寸したる日用品、古着、青物、魚屋等の売店を出し、俄出来の商人町を現出し、昼夜共に人も多くなり一時の事と思いに、今日に至るも相変わらず見世を出せり。

十九日 晴

七七日(四十九日)にて、大蓮寺上人を招じ読経供養を請け、一同焼香せり。親一は差支えにて来らず。今回の焼失を機とし、国道里道の取り廣げを謀り、多きは六間も取られ、又は間口老間半位にさるゝ家も有り、持主は迷惑なるべきも、町としては今を逸して好機有るべからず。然れども里道に至りては実行に至るや否。

廿日 晴

一昨日午後より汽車漸く開通したれば、十時十分発に乗りしに、当分は総て国府津にて乗り替えとなる。同駅にて谷ヶ仮停車場(山北町)発の汽車に乗る。然れども甚だ徐行にて馬入にて下車、仮橋を徒歩し鳥井戸より又、汽車に乗りしに、貳列車落ち合い、窓より乗り込むも多く、小荷物運搬者も壹個式十銭の規定を、四、五十銭と不当の要求をなすを見受く。藤沢にて下車し、行用を済まし、三時発に乗る。馬入より雨となる。帰宅すれば、親一東京より来着す。

廿一日 晴

親一と墓参りし、山角町より小峯通りを桜馬場に廻りしに、至る処道路破潰し甚だし。午後より親一帰京。

廿二日

廿三日

復興会組織に付き相談会に出席。龍夫(永左衛門孫)東京より来る。

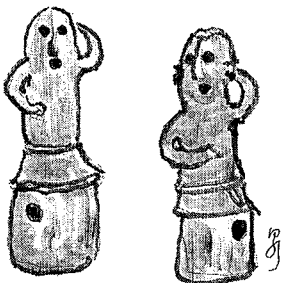
廿四日

廿五日

秋を楽しみに移し植えたる糸すゝき、石燈(籠)は倒れ、庭石は飛び出して、破潰を極めたる坂路にゆかしくも穂の出たるを山田氏

見せばやと庭に生ひたる糸すゝき細き心も知る人やたれ

(続)



遺稿

露国・日露の役俘虜のこと(八)

八十七年ぶりのお礼 後編(二)

文と絵

隠岐威重

二人のロシア人捕虜の記録

二人の露人の本が手元にある。F・クプチンスキーの『日本の収容所』とノビコフ・プリボイの『ツシマ』。日本書名「バルチック艦隊の壊滅」がある。

一人は陸軍の青年将校、他は農民出の一水兵の革命作家。

二人の目で見る日本。日本人。収容所。露人同胞の姿、相違を浮び上がらせて面白い。

F・クプチンスキー、その著、『日本の収容所』明治三十七年(一九〇四)夏、包囲下の旅順から脱出、旅順の情報総司令官クロハトキンに送る密書を携え、海上で拿捕され松山に送られた青年将校。重包囲の旅順から支那のジャンクに単身身を委ね行く。勇敢で仕事に打ち込む一途の青年将校。

だ。利発の中に充分西歐の教養と同時に青臭い自己主張が強い。

捕虜条件にはこんな事迄許されるのか、それを限度一杯主張する彼等の態度には驚き入る。もしこんな精神、実務が太平洋戦の時、特にシベリヤで過ごした我が国の捕虜の取扱いを思う時、隔世の感を深く感じ入る。

食物の話しよう。これが一般収容所を理解しやすい。捕虜の献立について云う。

一日の食費・将校……：五十五銭、下士、卒……：二十五銭

参考までに、当時日本兵は十五銭、米は一升十二銭、巷のカレーライスも同じ、酒一升四十銭の時代だ。

将校

朝：パン・バター付き、

紅茶・ミルク砂糖付き

昼：パン・バター付き、

スープ・卵付き、カレー

ライス、紅茶・砂糖

夜：パン・野菜スープ・

タンカツレット・紅茶・

ビーフシチュー・魚フ

ライ・茶

昼食の主要、日々一品・

コロケ・ビーフオムレツ・ビーフステーキ

下士・兵 朝：パン・バター付き・紅茶・ミルク砂糖付き

昼：パン・イワシフライ・

人參・大根・紅茶

夜：パン・マッシュポテ

トウ・米・大根・紅茶

ビーフステーキ・スー

プ・米入りシチュー……

昼代わるがわる

シチュー・豚シチュー・

オートマッシュ……夜かわるがわる

将校と兵の献立の差は相

当であるが、それでも現在の

我々より上ではないかとお

もえるが如何。でも、捕ら

われて自由を縛られている

と何かと不平が出る。捕虜

の食事の不平を、神戸のフ

ランス副領事(露国代理人)

が明治三十七、八年(一九〇

四)に調査したが、戦時

下牛肉不足の中でも新鮮な

牛肉の支給があり優遇であ

る、と不心得を戒めている。

また、アメリカのアウト、

ルック誌の記者ジョージ・

ケントが観戦の帰途、松山

に寄り「収容所はプリズン

と称するには不適切」と言

葉を残している。

また彼は、収容所内の学

校にも驚いている。日本海を越えて送られて来た露国の俘虜が初めて自国の文字の読み書きをこの地で習うとは、と。また望む者には英語も教えていたと。

因みに、俘虜のあるグルーアの学力は、普通に出来る者一九七名。やっと読める者一四二名文盲三六五名となっている。

酒は収容所内では禁止。だから飽くまで制限された中の優遇だ、受ける方から言えば禁止項目があればコンチクシヨウと思うのは人情だ。

だが、当時のなけなしの国力では大変な優遇だと思ふ。また、捕虜の生活自体も大変牧歌的だったように映る。

つぎに海の一水兵(農民)の代表ノビコフ・プリボイについて。

ノビコフは、欧露タンボラ県の僻村の農家の子。父が長く軍に勤務し、その父から読み書きを勉強した。

当時の農村には小学校もない。母は、ポーランド系の信仰深い婦人で、彼を修道僧にする心算でいたが、ある日彼は、一人のマドロスに海のことを聞き、海に憧

れ、徴兵適齢の時海軍を志願して、この草深い大陸の奥の子は水平になった。日露戦ではバルチック艦隊の最新鋭戦艦「オリョール」(驚)に一水兵として乗り組んだ。もうその頃、彼は革新に目覚めた運動家であったが、同時に勇敢な水兵でもあった。バルチック艦隊は、北海の軍港リバウを一月十六日出港、近くの北海で英国漁船を日本の水雷艇と誤認、砲撃する茶番劇を起こし世界に物笑いの種を提供した。その後、アフリカ大回りの喜望峰沖

を経て、フランス領マダガスカル島で一息つき、ここでスエズ経由の露第三艦隊と合し、インド洋を経、また印度支那半島のカムラン湾で最後の休養をとり対馬沖に向った。フランス領以外の港では日本と同盟を結んでいた英国海軍の監視が厳しく、同時に革命の厭戦の匂いに悩んだ不快な航海のようだった。対馬沖の日本海で連合艦隊に完膚なき撃破を受けたことは承知のこと。でも彼は無傷で熊本の収容所に入った。



手製楽器演奏の場面

その航海、開戦の様子を先に挙げたが、『ツシマ』(日本書名『バルチック艦隊の壊滅』)として記した。

その記述は相当後のことであった。理由は、ノビコフが熊本の収容所で各艦の乗組員から得た戦況記録を帰国後革命のドサクサで一時的見失った。それが二十二年後、偶然田舎の自宅の小屋から発見された。喜びにあふれ執筆に入り、シヨローフの『静かなドン』に比する名著と評されスターリン賞に輝いたとか。

F・クプチンスキーが将校の目で見る視界、将校の殻に入り、兵、その出身の農民を見る目は冷めていた。冷たいと云わなくとも、無関心である。そして一人よがりであり青臭い。

ノビコフは違う。将来の作家、当時の運動家の目は違う。収容所の生活、制限も不自由も勿論あったろうが、そんなことには殆ど触れない。

収容所も、祖国の農村でも似たような酷な暮らしを送っていたのか、人間の最低の暮らしはこんなものだ

と割り切っていたのかも知れぬが、何も触れない。小気味よく触れない。そして、戦争の資料集めに馳せ巡り、革命運動の下地を作る作業に熱中し、帰国直前、フラク運動が露見しツァーリ宮廷を支持コザック士官の煽動で、大衆のため危うく半死に至りそうになった。

八カ月半の熊本での捕虜生活から解放されたノビコフは、彼の著書『ツシマ』のエピローグの中で次のように記している。

開放された兵士達が喜びのあまり微笑しながら眺める日本人の自愛心、それは彼らが心から満足しているものでなく、三百年間の鎖国の徳川体制が生んだ自愛心だと鋭く見抜いて描写している。そして一転、戦前長崎湾の北西部にあったイナサ村のロシア政府の艇庫・小工場・海軍集会所を描いている。その集会所の愛想のいい家政婦、玉突台や豊富な本がある図書室を写し、また一転して自らの儂い恋のことも珍しく小さな声で記していた。ロシア文学を絆として仲良しになった通訳とその妹、芳枝との恋を真剣に語っている。活動家

で祖国に再入国を許されぬため、芳枝と共にアメリカに渡っての暮らしを考えていることを述べている。

が、急に党员でも帰国を許されることになった。革命が間近に迫って来たのだ。党员を變に除外出来なくなったのだ。そのことは芳枝との離別を意味する。革命に荒れる祖国に恋人を連れて行くことはノビコフには出来なかったのだ。

その後二十年を経て、ノビコフの日本人の友人、ソ連の駐日大使館の速記者阿部よしえ氏に一九三四年(昭和九年)一月に再会している。阿氏は三十年來の友人なのだ。ツシマのエピローグを当時書いていたノビコフは昔の恋人の名前を失念して困っていた。阿部よしえ氏のヨシエの音が気に入り、許しを得て、本の中にその音を入れていると云う次第だ。

恋人の名を忘れる奴もどうかと思うが、F・クプチンスキーの日本人看護婦ベタホメより愛嬌がある。

(続)

古文書講座 15

名主連の職人賃金引下願書

ねずみ送り

今回は、子年に因んだ話として、

まず南足柄市千津島で天明六年(一七六六)四月十七・八日に行われた「ねずみ送り」を紹介する。初日に大山蓑毛の御師を導師とし各人の田で祈禱し、翌日は早朝から村役人・戸主・若者総出で神輿をつくり、その夜松明に鐘・太鼓で神宮山まで送った(『南足柄市史』3 No.131)。

村をあげての祭りの狙いは何だろうか。史料には書かれていない。田畑の害虫除けの「虫送り」は知られているが「ねずみ送り」は珍しく、速断出来ない。

ねずみと満水の被害

写真版は栢山村の小沢小繁子が天明六年(一七六六)に写した文書の写しである(高野肇氏所蔵・『小田原市史近世』3 No.58)。

- ①元日に日蝕があった。
- ②春に野鼠が増えて麦を刈り、五月大豆を一本無しに食った。
- ③五月より出水、七月一八日大満水

で酒匂川左岸土手が決壊、右岸は無事。

②の期間中に千津島の「ねずみ送り」が実施されているので、鼠による農作物の被害防止

内田 清

止行事だった事が分かる。

しかし伊豆では一匹の鼠を輿に入れて野山を担ぎ回り海に放つそうだが、千津島では鼠を輿に入れたかどうか不明である。西相模での類例を発見したい。

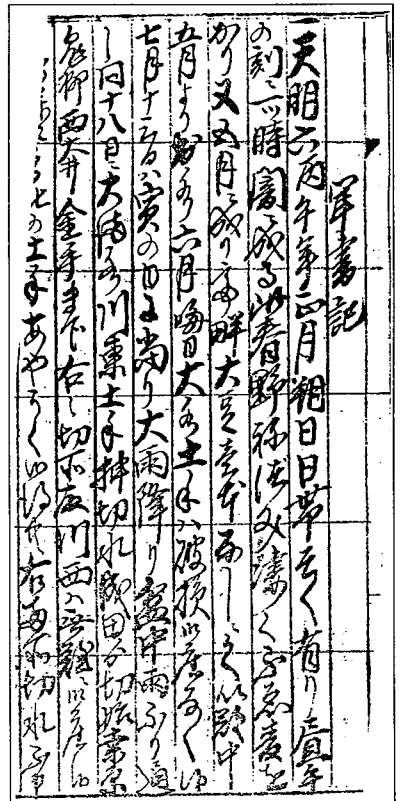
鼠算では、つがいの鼠が一年間で二七七億匹に大繁殖するそうだが(今泉忠明『ネズミの超能力』)、当地でも度々大繁殖し草・竹・木までを食い荒らしている。

③満水は当地の歴史用語で、水位の異状増大による氾濫、すなわち洪水・高波被害を意味している。

酒匂川東(左岸)土手が成田で決壊し、順次上手の土手が金手まで切れたので右岸の村は、無事だった。

史料の省略部には、川東八分冠水下流今井が決壊。長雨で芋・大根以外は凶作。翌年米価高騰、五月に江戸そして小田原でも新宿(浜町)で米屋打こわしがあつた、と記されている。

こうして天明二年からのいわゆる天明飢饉も収束するが、小田原では、ねずみも一枚噛んでいたし、七年に二宮金次郎が誕生したのである。



聞書記

- ① 一天明六丙午年正月朔日、日帯そく有り、昼午の刻二ツ時闇ニ成る。此春野柿徒み凄くふえ、麦をかり。又五月ニ成り亭畔大豆甚本なしく以。郡中
- ② 五月より出水、六月晦日大水、土手ハ破損御座なく候。
- ③ 七月十三日ハ寅の日に当り大雨降り、盆中雨ふり通し。同十八日ニ大満水、川東土手押切れ、成田より切始桑原鬼柳・西大井・金手まで、右之切所故川西ハ無難御座候。

以下略

注意してほしい語句

表現に問題はあろう。

日帯そく有り

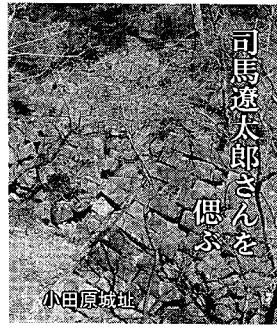
あしきん

にたいそくあり につそくが日蝕の古語方言であるので、帯を誤字と見易いが、太陽が日食のまま日の出または日没となること(『日本国語大辞典』)である。とするとこの年の日蝕は正午頃の皆既食だったので、(天)と「く」(久)は似ている。

右のきれしよゆえ、かわにしハぶな
川東堤が決壊したので、川西の

堤は無事だった。よくあることな
ので、平時から堤の保全に努めて
いた。「所」も「故」も頻出文字な
ので似ている取・殿と併せて体得
したい。

に「大地震お
見舞申し上げ
ます」と鉛筆
で走り書きを
した。返礼を
よこされると
は夢にも思わなかった。
その文面を見て嬉し
た。史談を毎号、目を通し
ていられたに違いないと……。



柄は行っておりませんね。
虚をつかれる思いでした。
大作家であるのに少しも
偉ぶることなく、当方の無
駄な願いを、やんわりと受
け止められていた。
葉書の消印をみると、'89・
6とあり、七年前のこと
である。続いてこの年の九月
小田原史談を添書と共に送
った。やはり返事を頂いた。

司馬遼太郎さんに、『街
道をゆく』で、是非とも箱
根路や足柄道を探りあげて
欲しい、という添書と共に
小田原史談を送ったことが
ある。勿論、返事は少しも
期待していなかった。
ところが、間もなく司馬
さんから葉書をいただいた。

そういえば『街道をゆく』
で、かんじんの箱根や足

「小田原史談」ありありと、
「箱根」も「足柄」も「街道」も
「小田原」も「歴史」も「文化」も
「自然」も「風景」も「人情」も
「すべて」も「心」も「魂」も
「すべて」も「心」も「魂」も
「すべて」も「心」も「魂」も

ふれがき。

一月十日。

道三が一時期西村姓だっ
たことはいわれ、面白く
拝読しました。

添書を見ると、返事をよ
こされる。これは、司馬さ
んにとって煩わしい事と思
われ、以来、添

書なしで小田原
史談を送り続け
た。

昨年の一
月、
史談を送る際
に
阪神大震災が起
こったばかりな
ので、封筒の裏



北条氏政の首塚

寺にある、北
条氏政の首塚
と墓誌の写真
が送られてき
た。
墓誌には次
のように刻ま
れている。

北条氏政公 の首塚

北条氏政(小田原北条氏
第四代)は、天正十八年
(一五九〇)小田原落城で、七
月九日、弟の氏照(八王子
城主)と共に、医師田村安
齋の宅に移り十一日に切腹
している。安齋の居宅の場
所は、はっきりしていない
が、安齋町の旧地名が残る
南町二丁目一番あたり、と
考えられている。

氏政・氏照の遺骸は、小
田原駅前前の旧伝心庵に葬
られた。現在、込山和勇氏の
遺志を継いだ佐々木康平氏
が、北条氏政・氏照遺跡顕
彰会代表となり、毎年七月
十一日の命日に、墓前祭が
行われている。

ところで、この程、東京
都八王子市の中村俊郎氏か
ら、静岡県富士市蓼原源立

小田原城主(第四代)
北条氏政公首塚

天正十八年(西暦一五九〇年)
七月豊臣秀吉、徳川家康
伊達政宗の連合軍に攻め
られた小田原城は、世に
言う「小田原評定」の後
ついに開城、城主氏政公
は切腹。京都五条の橋に
さらされた首級を、家老
小棹城主佐野新左衛門尉
景政が当寺に埋葬し、菩
提をとむらうため、五輪
塔を建立。富士川の洪水
で他は流失したが一輪の
み当時のまま残っている。

中村俊郎氏の先祖は、北
条氏照の家臣で、氏照と共
に小田原城に來り籠城した
が、落城と共に八王子に戻
った。氏照の首級は八王子市
宗閑寺に埋葬されていると
伝えられている。

お知らせ

紙面の都合で、磯部正人氏
の「生かされて 私の軍隊体
験」、川瀬春雄氏の「酒匂と言
う地名の起こりについて」、石
綿勉氏の「孝行者藤右衛門尚
清」、岡部忠夫氏の「紅連洞・
坂本易徳」は次号以降に掲載
いたします。

三浦と二宮尊徳

—三崎町の報徳仕法を通して—

齋藤 清一郎

今年の史談会の初詣では、去る一月二十一日(日)に三浦の七福神めぐりが行なわれた。車中や現地でも、七福神の話はもとより、三浦と小田原との縁などについても説明を受けた。その時、最寄りの人に「報徳仕法も行われたんですよ」と言っていると、どなたも「ホー」ということで驚いていられた。

そんなこともあったので、二宮尊徳についての認識をより深めて頂く一助にもと本稿を認めた次第である。

「報徳仕法」仕法とはやり方、方法という意味であるが、単にそれだけではなく、理念というものが多分に含まれている。そして報徳仕法とは『大辞林』によると「二宮尊徳の創始・唱導した生活様式で、分度・推譲・儉約貯蓄などによって、農村の困窮を救い、農民に安全な生活を営ませることがめざされた」とある。

二宮尊徳とは、年配者は大方知っているが、方々の小学校などに像があるあの二宮金次郎である。

※ その報徳仕法が、なぜ漁

業の町に？と訝る向きが多いと思うが、尊徳の難村立て直し、困窮者救済は、たしかに農村あるいは農民が多かったが、中には山村漁村、あるいは武家や商家にまでも及んだのであった。

※

三浦半島の相模湾側の芦名・長坂・大田和・林・長井(横須賀市)の五カ村は、文政四年(一八三三)〜天保十四年(一八四三)の間小田原藩領であり、大久保家の支配を受けていた。そして、天保の大飢饉に際しては、急場を凌ぐための救急仕法が行われ、お手許金千両の中

から百二十七両がこの辺りの村々に配付された。

又、天保九年八月には、浦賀町(横須賀市)の豪商宮原屋の前田清兵衛瀛洲が、親戚筋の大磯宿川崎屋孫右衛門家の一件で、伊勢原の加藤宗兵衛(茶加藤先祖)と共に野州桜町(栃木県二宮町)の尊徳を尋ねた。

これが三浦の地に報徳仕法が導入されるきっかけとなるのである。

尊徳は、この地への来訪を請われたこともあったが、各地の仕法指導のため多忙を極め、彼は一度も三浦へ足を踏み入れることはなかった。直接仕法を推進したのは尊徳の教えを受けた土地の豪商達であった。

浦賀町では瀛洲を中心とする宮原屋一族、三崎町では湊屋竺卿を中心とする湊屋一族、長井村では渋谷宗頼らであった。

ここでは、紙数の関係で三崎町の仕法についてのみその概略を記すことにする。

※

三崎町は現在三浦市に含まれているが、三浦半島の相模湾側の最先端、「雨は降る降る城ヶ島の磯に」の北原白秋の歌でも知られた

城ヶ島のあるところ。昔から漁業の町として栄えたところである。

この三崎で一、二の豪商湊屋があった。この湊屋は、酒・醤油をはじめ百貨を扱い、山林や田畑も持ち、小田原藩の御用達(御用商人)をも務め大変な栄華を極めていた。

当時の主人五代目伝三郎は、長男が十八歳になった天保元年、自分四十七のとき、家督・名跡を譲り、頭を丸めて「竺卿」と号した。以後禅に打ち込み、行脚して京に上り、五山で修行したという。茶の湯・俳諧・碁将棋・浄瑠璃などにも通じ、後に尊徳から「竺卿は、悟道の話し相手になる」と評された。

湊屋の本家は竺卿の子六代目伝三郎、分家は善十郎。この分家も可成り繁昌していたが、文政四年十二月に大火のため、商品を納めていた本家の倉庫三棟も焼失、大きな負財を抱えて休業中に、文政十二年(一八三〇)に

名主に挙げられた。ところが同年十月に又々町の大火があるという、引き続く不幸多く、さらに加えて天保飢饉などで、魚類の商売も

不振となり、復興の見込みも全くなくなっていった。

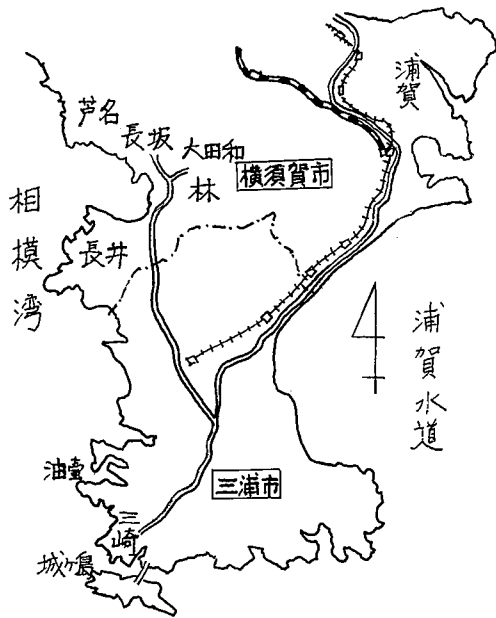
さて、竺卿と尊徳との関わりは、一族がこんな状況の天保十一年の早春に始まる。

※

浦賀宮原屋の隠居前田清兵衛瀛洲は、三崎の湊屋竺卿の従兄であった。(養子清兵衛は竺卿の二男)彼は前述のように、既に尊徳に接し報徳の教えの至教なるを心得ていた。その瀛洲から、二宮尊徳が、小田原領内の報徳仕法のために野州桜町から出張して来て滞在している。自分も親戚の立て直しの指導を受けに来ているが、「古今に稀なる妙法だ」と思う。ぜひ聴きに参られよ」と勧められた。

竺卿は、前々から、遠縁に当たる大磯宿の川崎屋孫右衛門が尊徳の指導によってみごとに復興したことも知っていたので、妻(長男・二男・三男と両家の番頭まで引き連れて竹松村(南足柄市)まで出かけた。

実はこのとき、尊徳は、同村名主河野幸内宅に滞在していた。その河野家のうしろ隣の医師大内玄周(現同市中沼の大内病院先祖)



の離れを借りて、昼夜仕法の傍聴をした。あるとき、尊徳に身辺の状況を語ったところ、これまでの驕奢を尽くした生活ぶり、畜生道の由と大喝された。己れの不実を悟り肝に命じた竺卿は、帰宅すると直ちに隠居所新築など中止して、人々を集め趣旨を説明して、三崎一帯の報徳仕法に着手した。

と心得て帰った彼は、まず自分夫婦と長男夫婦の四人分のぜいたく衣類六十七点を売却処分した。これが六十両になった。これを、尊徳からの「報徳善種金」五十両(天保十一年三月五日付けで始まる三崎の仕法帳による)と合わせて仕法原資とし、又、田地の一部を提供、毎年四〜五人の貧窮者に作り取りさせるようにした。

こうした篤志に感激した人々は、おおい「善種金(報徳金)を差し出すようになった。そして、十一人に八十四両余の無利息年賦

金が出された。又、数年前に焼け出された六軒の家も、篤志の報徳金と湊屋の資金で再建された。翌天保十二年も当然仕法は継続推進されるわけだが、この年の七月から十一月ごろにかけて、この辺りの海はなぜか魚類が全くいなくなってしまう、漁師など町民の生活は、天保七年の大飢饉以上の困窮ぶりであった。十二月十日付けで竺卿の許に届いた尊徳からの書簡にも、「……三崎辺、七月より漁獲一切なく困窮のこと……救済に奮発するよう……方一救済に支障起きたら、米・金を繰り出す。」とあった程である。

竺卿は救済に全力をあげて当たったが、その内容は、①困窮している「報徳連中」数十人には米を二斗ずつ二回、大麦二斗ずつ一回、銭は五百文ずつ二回、②年末に全困窮者に五十五貫文を出して配分する、というものであった。

そのほかの推譲を加えると、湊屋のこの年の推譲総額は、金百二十九両と米二十俵にも及んだ。これに、報徳金や年賦返済金等を加えたばう大な資金をもって

貸付け・救済・表彰などの諸事業をすすめたのであった。人々は、こうしたありがたい恩恵と、報徳仕法に対して、感謝・報恩・信頼の気持ちが一層高まり、報徳金推譲の増加にもつながった。

又、当然尊徳との交流も密になり、竺卿は、尊徳訪問が都合六回、浦賀の瀛洲は十三回にもなる。この両名を含めると、『二宮尊徳全集』の日記にみられる三浦関係者が尊徳の許を訪問し、逗留して指導を受けた人数は、実に八十二人、村数で八カ村に及ぶ。時には逗留が一月以上にもなる者もいた程である。

もちろん、前述したように、尊徳は繁忙のために三浦を訪れることがなかった代わりに、門人らを度々遣わしている。一の門人富田高慶(報徳記)の著者は三回も訪れている。書簡のやりとりも大変多く、尊徳から三浦側に発信されたものだけでも二十七通にもなる。

こうして、天保十一年から嘉永年間(二六〇〜二六五)

異説「こゆるぎの磯」

なみまより よふかく
いでし つりぶねの
まつほどすぎて ものを
こそおもへ

これは、今から一千年前
(九六一年)、活躍中の歌人
あり、相模国司であった、
源重之の歌であります。

歌詠地は不明であります
ので、『神奈川県史』には
収められていません。

この一首につきまして、
目加田さくを先生(梅光女
学院大学客員教授・福岡女子
大学名誉教授)著『源重之
集全釈』(風間書房昭和六十
三年九月三十日発行第七九頁)
から引用させていただきます
と、

あまのいへにやどかりた
るに ひくるゝまでつり
ぶねのみえねば

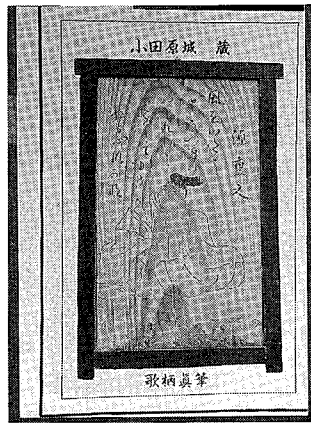
なみまよりよふかくいで
し つるぶねのまつほど
すぎてものをこそおもへ

〔通釈〕漁師の家に宿をか
りたところ、日が暮れるま
で、釣りに出た漁師の舟が
もどらないので(心配して詠

んだ歌)昨夜、夜ふけに、
波間に灯をキラキラさせな
がら夜釣りに出かけた舟が、
朝帰るものと待ってるのに、
予定の時刻をとうにすぎて
も戻らぬ。待つて待つて、
もう日も暮れかかる。心配
でならぬことよ。

一千年前に旧縁を求めて

歌人 源重之(3)
日下部 庄一



まいります。期待感から、
この情景は、相模権守重之
公が、任地内で、民情視察
を行い(今日の民宿のような
ところで)、そこでの事を詠
んだものではないかと、思
えてなりません。

目加田さくを先生は、源
重之公の歌は、「……諸本
独自歌を合計すれば、三百
三十首」に達すると、述べ
ておいでになります(『前

である。

重之公の「こゆるぎの磯
のわかめ……」の一首が、
任地相模での歌であると確
認されております。

上掲の「なみまより」が、
もしも、相模での歌詠であっ
たならば、と思いつながら拝
見しますと、希望が広がり、
心に特別な感情が生まれて

掲書『解説十三頁)。三百三
十首を遺す程の歌人が、相
模では、一首のみとはどう
も合点がいきません。

相模権介着任は、安和二
年(六六) 説と、天禄二年
(九七) 説とあり、権守は、
貞元元年(九六) から天元
三年(九八) まで勤め、併
せて約十年間、相模で国務
を執ったと思われる重之公

『源重之集全釈』(一九四頁)
から引用させていただきます
と、
齋宮の女御うちにおはせ
しむかし、あるたちはき
のをさ、承香殿のにし
つまどに立上れり。小納
言といふ人、いとくちと
くわかよむ。このきみた
ちも人に物いひかけよと
いひよりて、まつ、いかゞ
いはんとおもふとて、そ
でとりかはしたり。たれ
にとへば、みなもとの
こたへず、おなじきな
らざといふ。いろにおも
ふをとこ

こゆるぎのいそのなのり
そなのらねど
そこばかりをぞさぐりし
りたる

〔三省堂〕を開いて「揺るぐ」
を引いてみると(揺れ動く)
とあり「揺るぎない」を引
くと(ゆらぐことがない)
と明快に記されています。
「こ」は「小」を、ゆるぎ
は「揺るぎ」を、充てはめ
てみて。
もう一つのこゆるぎ、そ
れは重之が相模へ下向する
以前に、都で詠じた一首を、
また、目加田さくを先生の

〔通釈〕齋宮女御様が宮中
においてであった昔日のこ
と、さる帯刀長が、承香殿
の西の妻戸に立ち寄った。
小納言という女房がいたが、
その人は大変すばやく洒落
たことを言うし巧みに歌を
よむ。帯刀長に友人達が、
この小納言に何か言ひかけ
よとせつ。そこで、帯刀
長は小納言のもとに歩みよ

て、「さて何と言おうかな」と思案するというので、まず、男は簾の下から手をさし入れて女とお互いの袖を取り交わした。小納言が「貴下はどなた」と尋ねるので、男は「源のこたへず(です)」と返事する。すると「私も同じくなのら(ですわ)」と女がいう。そこで、これはしゃれた雰囲気だと思ふ男は、こようみかける。

こゆるぎの磯に生えている名のりそぢやあないが、な名乗りそで、貴女

〔参考〕こゆるぎの磯―神奈川県大磯の海岸

をんな、さればよといひて、きゝもはてぬに

いそなつむあまならばこそわたとつみのそのものめくこともゆるさめ

といひつゝぞとしへける

〔通釈〕女は、「だからさ」と言つて、男の歌を終りまで聞きもおわらぬうちに(こよう返歌をする)

磯で海藻を摘む海女でしたらね、大海の底の藻をさぐるようなことだつて、許しましよ。ところが、私は海女ぢやあ、ありませんからね、おあいにくさまよ。

と言ひ言いまあ年月がたったのだつたよ。

〔語釈〕。そのものめくーいさかエッチは名前はお名のりにならないが、そこからへんにいらっしやるのが小納言さんだろうと、手でさぐりあてたんですよ。

〔語釈〕○齋宮の女御―徹子女王。重明親女王。三十六歌仙の一人。家集をもつ。

承平六年(九三三) 齋宮卜定、天慶八年(九三六) 退下。天

曆二年(九四〇) 叔父村上帝

女御と称せられる。琴の名手。その女親子内親王も齋宮となり、伊勢下向に同道した。○承香殿―齋宮女御の御殿であつた。この詠歌

年次は、したがって、齋宮女御が承香殿女御であつた期間、天曆二年(九四〇) 十二月〜康保四年(九六三) 五月四日村上帝崩御までである。○いろにおもふー色に思ふ、色とは、美、ここは、

しゃれた感じだな、と思ふ意。○なのりそーなのりそ、海藻とな告りそ、懸詞。ここに、再び、『前掲書』(二五頁)を、引用させていただきますと、

〔参考〕

風俗歌 こゆるぎ

こよろぎの磯立ちならし磯ならし菜摘むめざし濡らすな濡らすな沖に居れ居れ波や濡ろ濡ろも君か食すべき菜をし摘み摘みては

古今集 二十東歌 相模歌

こよろぎの磯たちならし磯菜つむめざしぬらすな沖におれ浪

殿上人の歌詠の中で、こゆるぎ、と表現される言葉の意味は、単なる地名だけの意味でしょうか、磯は、

全国津々浦々にありますのに、上代から京の都に聞こえている「こゆるぎの磯」とは何を意味するのでしょうか。風俗歌「こゆるぎ」

の中にも、『古今集』の相模歌にも、共に「沖に居れ波」が挿入されております。まるで津波に対するようにも、とれます。

重之、相模に着任する、約三十年前に、「承平・天慶の乱(九三三〜四二)が起こっています(平将門の乱、純友の乱の総称。起こった時代の年号から、このように呼ばれる)。それは、平将門の乱と純友の乱は、富士山が爆発して、噴火が続き、東国世情不安となり、それがきっかけで乱が起きた、とも云われております。

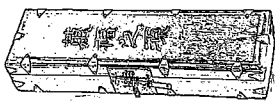
私達の、祖先は、富士火山地帯に居住しておりました、今日でも直下型地震の地区として大変心配されております。私も、地震情報を知る度に、小さくて済めばと心配します。現代の、私でさえそうですので、昔の相模の人々は、どうだったのでしょうか。一度、地震の事を思いだすと、心配で心配で夜も眠れない程であつたと思います。

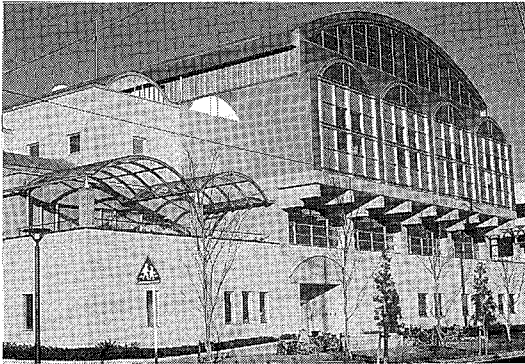
相模は、土用波にさらされる海岸線であり、宿命を、甘受しながらも、災害は、小さくしたいと、願わずにはいられたかと思ひます。

平成の現代人は、地殻エネルギーが大量に溜まらぬように、科学的に小さく分

散する方法はないものか、などと考えます。が、古代人は、異なる方法で考えたと思ひます、そのような心が言葉となって、「小、揺るぎ」を作り出したのではないのかなと思えてきます。災害を、小さく小さく、を、祈り言葉としてゆくうちに、やがて「こゆるぎ」を唱えらる、大災害を抑えて分散せらるよう、との呪文願望となり、やがてこの地方の地名となり、相模海岸の代名詞となつて、更に、災害押えの修飾語として、古代の都へと聞こえて往つたと考えたいものです。その、場所は、大磯であり、今の小田原であり、相模海岸のいづこでもあつたと思ひます。

(続)





去る1月4日、小田原市中里にオープンの川東(せんとう)タウンセンター・マロニエ



今度は大丈夫 小田原城二の丸銅門復元工事



小田原城址お茶壺橋 小田原警察署前

街

いろいろ



撤去の観覧車と飛行塔

城址公園 遊園地

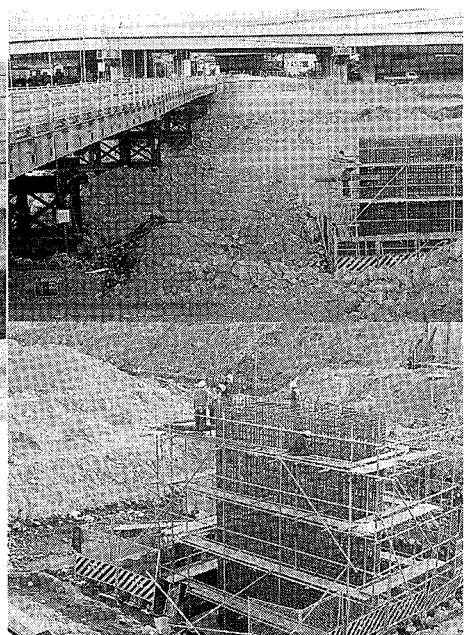


小田原は 水い捨て禁止

早川橋架替工事



大地震の折、救援物資の陸揚げは、早川漁港が当てられると考えられ震災時、早川橋は重要な道路の役割を果たすであろう(大正大地震では御幸の浜が陸揚地となった)。



お堀端商店街通り

新刊紹介

◇足柄平野の思い出

著者・発行者 曾我 保夫
著者住所 〒250小田原市栢山

六三一三 Ⅷ〇〇(五〇〇)三
B6判 一五ページ

著者の曾我保夫氏は、本会の副会長。本書の内容は、

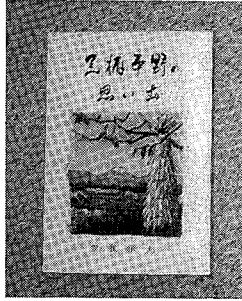
一、年中行事

二、消え行く「言葉」

「言い伝え」

三、諸事変遷(雑感)

三編に分かれており、時代と共に、次第に消えゆく年中行事や言葉、言い伝えなどの他に、明治・大正の出来事、乗物の変遷を幅広く記し、貴重な資料となっている。



◇小田原市史 史料編

近世Ⅰ 藩政

『小田原市史』は、全十六巻(史料編九巻、通史編三巻、ダイジェスト版一巻)の



刊行予定で、一九八八年から始められたが、今回の発行九冊目。うち史料編は、累計八冊で未発行分の近代Ⅲを残すのみとなった。

本巻は、史料を「歴代藩主」「家中」「藩政」「幕末維新」に分け構成。

「歴代藩主」では、藩主

大久保氏、稲葉氏の系譜を

載せる。「家中」には、大

久保氏順席帳(大久保忠隣時

代、享保九年、文政八年、文政

年間)と大久保氏家中法度

(法令)を収め、家臣団の構

成と統制、藩士の職務や生

活がうかがえる。「藩政」

では、稲葉期の藩制(「稲葉

日記」を抜粋)、寺社の統制、

治水と再開発、後期の藩財

政と改革、海防の五項目に

分け、稲葉時代の藩の動向

富士山大噴火後の酒匂川を

中心とする治水事業、藩政

の維新と改革や藩の海防政

策などの様子が記されてい

る。

遠隔地で購入希望の方は、直接〒250小田原市城山四一―二小田原市史編さん室(Ⅷ〇〇 Ⅷ〇〇(五〇〇)三)に問い合わせるとよい。

計報

川口又之助氏

(小田原市田島、二〇)

昨年十月二十日逝去

されました。享年八四歳

ご冥福をお祈りします。

小田原史談会行事

三浦七福

平成八年一月

神めぐり

二十一日(日)晴

小田原駅前八時出発八時帰着

「コース」小田原・厚木道路小

田原東IC 厚木IC 東名高速道

横濱IC 保土ヶ谷B.P 横浜横須

賀道路 衣笠IC 延寿寺(大黒

天) 妙音寺(福祿寿) 白髭

神社(寿老人) 新井城址・三

浦荒次郎義意の墓・三浦道寸義

同の墓 見桃寺(布袋尊) 海

南神社(弁財天)・光念寺(同

上) 昼食しびき亭(城ヶ島) 慈

雲寺(昆沙門天) 円福寺

(憲比須) 野比 佐原IC 横浜

横須賀道路 保土ヶ谷IC 横浜

IC 東名高速道 海老名IC 厚



三浦七福神めぐり(延寿寺にて)

五福神(円福寺にて)



木IC 小田原厚木道路 小田原東IC……

〔参加費用〕六千円

〔参加者〕(順不同敬称略)

富田千春、向山重忠、山口一夫

杉山竹二、曾我保夫、岡部忠夫

近賀喜久男、小笠原長久、中村

俊郎・ツヤ、伊藤高子、浦井浜

子、奥津定・チヨ子、岩本武、

加藤三重子、勝保末子、石川タ

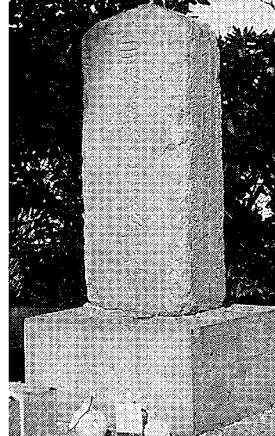
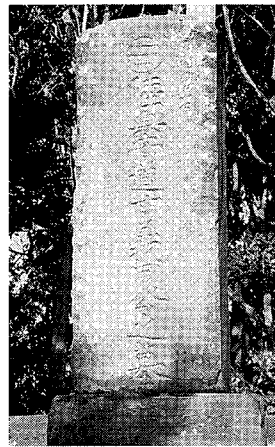
カ子、湯川玲子、廣山紀世、増

田任司・頼子、形岡タミ子、加

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店
 小田原銀座 アオキ画廊
 熱海 アオキクリニック
 足柄香粧株式会社
 飛鳥 魚屋
 紳士服の アメリカヤ
 (株) アルファ
 画材 ガクブチ ヲウエ
 伊勢治書店
 伊豆箱根トラベル 小田原
小田原
 かまぼこ
南足柄関本 おぎの整形外科・歯科
税理士
公認会計士 小澤重治事務所
株式
会社 小田原魚市場
 小田原ガス
 小田原市農業協同組合
 小田原報徳自動車
株式
会社 オートセンター・スギヤマ
 小田原中央青果 株式
会社
 オリオン座
 かまぼこ籠
 令 学 苑
 鐘紡株式会社小田原工場
 カネボウ化粧品鴨宮工場
 神尾食品工業 株式
会社
 木地挽 日下部産業 株式
会社
 かみやま小児科クリニック
 興電社
 小伊勢屋
 (有) 小松石材店
 さがみ信用金庫
 趣味のごらく さくらい
 宝飾専門店 Shimano JEWELRY
 防災器具 優光社

中華料理 昇玉
 杉山水道工業 齏
 杉本まぼこ
 石寿堂スポーツ
 大営不動産
 割烹 おる海
 二宮
 茶半家具株式会社
 ちんろう本店
 土谷建設株式会社
 角田ガクフ子店
 東京電力(株)小田原営業所
株式
会社 東華軒
 トーホー建物齏
 和菓子 菜の花店
 八小堂書店
 八子マサ店
 平井書
 富士写真フィルム齏小田原工場
株式
会社 報徳
栄町 松坂屋
 学生専科 丸マルク
 食器の店 マルサンストア
 みつゆき設計
 諸星運輸グループ
株式
会社 美濃屋吉兵衛商店
 みみづく幼稚園
 ヤオマサ株式会社
 山口菓子舗
株式
会社 ユアサコーポレーション 小田原
製作所
 防災器具 優光社



新井城址(油壺)

三浦道寸義同の墓

三浦荒次郎の墓(小田原・居神社祭神)

藤松枝、三橋國雄・ふさ子、和
 田治助、下川茂三郎、相原俊夫・
 佐和子、小川武明、西山辰三、
 角田道・幸子、劍持芳枝、山口
 廣子、小泉邦夫、神尾隆之、小
 栗良英、国見隆彦、田口鏡子、
 高橋アヤ子、佐宗正雄・二三、
 日野泰輔、至極敬一、府川宏江、
 斎藤清一郎、吉池清、三尋木啓
 子、小室恭子、森サク子、石井
 艶子、村山千鶴子、高田知子。
 以上五十五名

白秋歌碑 見桃寺

小田原史談(年四回発行)

年会費 普通会員三千円
〇〇二〇一三六四三三六
振替